

■ “美” とは？

この講義では、後半に演習として、実際に紙皿を用意して色彩の盛りつけを表現していただきます。その演習から、『美的にみえる“かたち”と“いろ”』の関係を意識していただこうと思います。でも実際には、色彩は“百聞は一見に如かず”ということで、作ったお料理を口に入れた方が味わい深いと思います。目の前の色彩だけでは実感が出ないかもわかりません。日頃、私達は生活の中で見ることを通して、“心地よい”とか“美しい”とか“可愛い”などと感じますが、そのようにいろいろな状況について「どんなものかな。」と気分的に思うことが、美しいかどうかという美の問題と繋がっています。また、人間は視覚を頼りに行動をしています。その視覚の現象である“見る・見える・見せる”という行為を毎回繰り返して生活をしているわけですが、これは主として“かたち”の現象になりますので、そのあたりをこれからご説明したいと思います。

“美”というのは、ご存知の通りというか当たり前ですが、美しい行為、話とか、一般的には芸術作品などを見る際に主として使用します。実は“生活の中の美”というのが、今、時代的には一番大事だろうと思っています。芸術作品などを見たり聞いたりして充足感を得ること、個人の好みも関係すると思います。“美しい”に関係する言葉はたくさんあります。美しい・麗しい・よいこと・優れていること・優れたこと・旨いこと、上手という字も書きますが、味が良いことももちろん入ります。ほめること・華やかなこと・立派なこと。哲学では“知覚・感覚・情感を刺激して内的快感を引き起こすもの”とされています。内的快感ですから個人差があるということは当然ですよね。“見立ての心”という言葉もあるかと思っています。例えば盆栽などは、特にそういう感情がすごいのだと思います。誰でも“見立ての心”を持っておりませんが、それに通じることかなと思います。

美というのは哲学用語です。“美”というときには抽象的で、一般的に美しいとか、今の説明のように、客観的で普遍的で社会的、あとは必然的な美意識というものに通じます。もう一つ、“快”という漢字があります。“快”は、どちらかと言えば“美”に対しては直接的な意味を持つということで、主観的・個人的・生理的・偶然的ということが言えると思います。

美は視覚現象によって、主に“かたち”と“いろ”で感じる感覚です。美学という学問があるわけですが、フランス語で *esthetique* と書きます。エステティックという日常では違う意味で使われていますが、明治の思想家で中江兆民さんが訳語で“審美学”と訳され、今は“美学”になりました。自然・芸術における種々の美を通じて美の本質・構造を研究する学問であり、根はそういう深いものではありませんけれども、日常的には冒頭で申し上げたような言葉で私達は感じています。